

社友小集（福沢諭吉）

光陰如矢十餘春 誰識當年風雨辛

今夜小堂相會友 彈丸煙裏讀書人

光陰 矢の如し 十 余春

解説 明治初期の作。蘭学を教えていたころの門下生と一夜歓談したときのことを写し、往時を懐古した詩。

誰か 識らん 当年 風雨の 辛さを

語釈 ※当年＝当時。あのころ。※風雨＝艱苦のたとえ。「漢書」朱博伝に、「士大夫に随従して、風雨を避けず」とある。
※彈丸煙裏＝諭吉は戊辰戦争のさ中も、学問を怠らなかつた、ということ。

今夜 小堂 相会するの 友

通釈 光陰矢のごとし、とは全くよくいったものだ。もう十数年も経ってしまったとは信じられぬほどである。戊辰戦争のさ中も、学問を怠らなかつた事を、一体、誰が知っているであろうか。

今夜、この小部屋で久しぶりに会う諸君は、彈丸と硝煙の中で共に勉強をした人達ばかりである。

彈丸 煙裏 書を 読みし 人